

「ある単位制高校の一年」

2019年10月、100年以上の伝統がある全日制の本校は、2021年度より地域唯一のフレックス型（定時制）単位制高校としての生徒募集が決まり、わずか約1年間の準備期間をもって開課程することとなった。まさに世紀に一度の大改革である。これを昨年度から担当することとなった。

フレックス型単位制高校というのは、簡単に言えば、朝9時から夜21時までに6コマ12時限の授業を開講し、卒業までの時間割を自分でつくりことができる学校である。ゴールは生徒一人ひとりの社会的・職業的自立。地域から与えられたミッションである。

設置の視点は以下3点。

一点は、学びにくい条件がある人に学びを開くフレックス・スクール。

キャリア形成の障害となる学習時間帯や曜日、学習量をほぼ自由に選択できるようにし、修業年数も3年から6年で自由に設定できる。午前中心、午後中心、夜間中心など学ぶ時間帯も自由である。働きながら学ぶことや、体調や家庭の事情に配慮しながら学ぶこと、あるいは自主的な活動をしながら卒業を目指すこともできる。

二点は、個性を伸ばせるアダプティブ・スクール。

個別最適化された学習（アダプティブ・ラーニング）を可能にしたこと。具体的には学習科目や難易度を選べることはもちろん、連携協定を結んだ大学や専門学校での学びを本校で単位認定できるなど、科目選択幅を大幅に拡大してキャリア選択の視野を拡大するとともに、特定の科目を特に伸ばせることや、苦手な科目は基礎的な内容から学べるなど、アダプティブな学びが可能である。本校の学びは白地のキャンパス。可能性は無限大である。

三点は、自分らしさに気づき、将来につなぐキャリア・デザイン・スクール。

そもそも単位制高校では、自分で時間割をつくるため、必然的に将来展望を考えざるを得ない。つまり、時間割づくりがキャリア・デザインを促す。そのために必要な自己理解と自分づくりはキャリア意識そのものに働きかける。そのために必要な多様な体験とふり返りを仕組むことで自分らしさに気づかせ、これを将来展望につなぐとともに学習意欲を高め、人生を切り拓くというカリキュラム設計を構築している。

さて、そんな本校は、現在2年生の全日制課程の生徒が卒業するまで、全日制とフレックス型の併存状態となる。

昨年来、併存期の2年間は両課程の生徒同士の関係性など「大変な状態になる」との先生方の危惧は、相当なものであった。そこで、全日制生徒には昨年からの継続的に単位制の後輩が入学してくることを意味を伝え続けた。その中で、さまざまな状況を乗り越えて入学してくる単位制の後輩たちを温かく見守ることができるかどうか、それができる素敵な先輩、心温かな先輩、大人の対応ができる先輩であってほしいことを訴え続けた。

一方、単位制の新入生には、入学式式辞で次のように伝えた。

「単位制高校は、小さな社会そのものです。みなさんは、その社会に生きる社会人であり、大人です。自分で考えず、正しく判断せず、行動もできなければ、単位制高校では、そもそも学校生活そのものが成り立ちません。学校生活を豊かにするためにも、幸せな人生をつくるためにも、「自分で考え、適切に判断し、行動できる」ことは、絶対条件です。ですから、本校では、高校卒業後に立派な社会人になるのではなく、入学を迎えた今現在、みなさんに社会人であること、大人であることを求めます。」

一方、多様な困りを抱えた新入生に対して、「多くのおみなさんが、さまざまな状況を乗り越えて、今日のこの日にたどり着いていること、本校フレックス型単位制を心待ちにしてくれていたこと、知っています。みなさんは、本校の出願、受検、笑顔の合格者登校、学力テストと受講ガイダンス、時間割づくり、そしてあなたと県との契約である受講登録、そのすべてをここにいる全員が、社会人として立派にやり遂げることができました。だから今、みなさんの入学を許可することができました。あなたがたは、中学生の殻を破り、今、大きく成長し始めています。」と伝えた。さらに、「とはいえ、期待とともに、多くの不安を抱えていることと思います。そこで、困りごとや心配ごとがあれば、先生方に相談してほしいということです。困りごとや心配ごとを自分から相談できる人は、立派な社会人です。相談して自分で解決できるということも立派な自立です。先生方は、みなさんの想いをしっかりと受け止めてくれます。本校は、みなさんにとって、ぬくもりのある「心のオアシス」でありたいと願っています。」と添えた。

学校経営において保護者の理解は必須。そこで、「本日はお子様の御入学、誠にありがとうございます。これまで、中には苦しい思いをされてきた方もおられるかも知れません。寝られない夜を重ねられた方もいらっしゃるかも知れません。生徒一人ひとりに、しっかりと自立してほしい、夢を叶えてほしい、幸せになってもらいたいという願いは、保護者の皆様も、私ども教職員も、もちろん生徒たちも同じです。そのゴールのためには、学校と家庭、何より生徒自身が、それぞれの役割を果たしながら、協働していくことが大切と存じます。生徒の可能性は無限大です。今まであまり学ぶことができなかった人も、ゆっくりでもかまわない、焦る必要はない、未来にふたをせず、前に進んでほしいと願います。」と添え、保護者の方々に教育主体としての意識を求めると同時に、学校を相談する相手として位置づけてもらえるよう、意識を喚起した。

さて、入学した生徒たちの今後は？次号から掲載します。

宮原 清（九州・沖縄地区理事）